

〈二つの差延〉の両立不可能な両立
——ジャック・デリダ郵便論における二相構造の解明——

木村稜（東京大学）

はじめに

人間理性は、完結したシステムを構築しその内部に安住しようとする本性的な傾向をもつ。だが理性がこの要求を満たしうるのは、それ自身無根拠な究極の根拠としての神ないし神の代理——デリダの術語でいえば「超越論的シニフィエ」（→第一節）——に対する独断的信仰によってのみである。超越論的シニフィエによる基礎づけの体系としての形而上学は、信仰秩序に従わぬ他者を外部へと排斥し、内部の純粋性の神話を言祝いでしまう。「脱構築」の思想家デリダが目指したのは、こうした内部の自閉的完結に抗して、外部＝他者と積極的な関係をとるもつことであった。

よく知られているように、デリダ思想はいわば二つの相貌をもつ。形而上学的テクストを読解し、それらを自壊へと導く「前期」と、正義や民主主義といった実践的テーマを論じる「後期」である。80-90年代のいわゆる「政治-倫理的転回」に隔てられたこれら二側面を対比ないし接続する研究は種々企てられてきたものの、（特に）前期に強調された純粋な外部への脱出不可能性と、（特に）後期に主題化された他者への絶対的な開放性という二つの論点の内在的連関（一貫性）は、十分に解明されてきたとはいえない¹。

だが、本論で確認するとおり、こうした外部＝他者をめぐると一見矛盾した二つの契機を同時に思考することこそが、脱構築の根本問題にほかならない。それゆえ、二相の異質性を保持しながらも、両者を分断することなく一貫した論理のもとでとらえ返すための道ゆきが模索されなければならない。こうした観点から本稿が注目するのは、脱構築の主要な駆動装置である「差延 *différance*」が二つの異なるモードをもつ点である。

différance は、「差異」と「遅延」という *différer* の二義性を反映すべく、*différence*（差異）の *e* を *a* に書き換えてつくられたデリダの造語であり、内部と外部の二項対立に先立つ（非一）起源よりすでに、内部の核心部を外部が侵犯することによって、内部が絶えず自らのうちに差異を抱えこみ、完結した主体としての自己現前を遅延され続けるという差異化の運動を表す。

デリダは「差延」と題された前期の論考のなかで、「エコノミー的迂回」と「まったき他者への関係」という差延の二面性を論じている。以下、本稿では前者の面を「**第一の差延**」、後者の面を「**第二の差延**」と仮称することにした。前者は（前期的な）形而上学への内在性に、後者は（後期的な）

絶対的外部への関係に対応し²、両者は互いを排除しあうため、この二面性は一般論理では思考不可能である。しかしデリダは差延の一元化を拒み、「一緒に思考しえない」はずの両者を「いかにして同時に思考するか」という重大な問いを提起している（M20）。

そこで本稿では、(1)この問いを前期から後期までデリダ思想に通底する主題として取りだしたうえで（第一節・第二節）、(2)前期と後期に挟まれた中期（80年代前半）に、「郵便」をめぐる一連の隠喩系を用いて記述されたマークの構造（郵便システム）において、この〈両立不可能な両立〉がどのように表現されているかを明らかにしたい（第三節）³。

1. 二つの差延

第一の差延とは、「延期された現前性 [...] の取り戻しをつねに目指すエコノミー的迂回」（M20）である。現前性ないし「充足的現前性」（M11）は、あるシステムが自己同一性をもつ完結した内部として、点的現在において自己を確立する（自己現前する）さまを表す（M17）。現前性は、任意のシステムが志向するテロス（目的・終極）であるが、第一の差延においてその実現は無際限に「延期」される。デリダは、あるインタビューで次のように述べている。

一方で差延は、絶えず延期される起源への、[...] 終末への欲望、運動、傾向によって駆動されている。（Weber 1996, 98）

第一の差延は、内部の完結という到達不可能なテロス——起源において失われた現前性——の「取り戻し」を「つねに目指し」ながらも、絶えずそれを取り逃し続ける「『終わりなき』目的論」（AD54）である。それはバタイユの「限定エコノミー」に類比される（M20）ような、最終目的を基点として有用性（意味）の連関を構築し、利益の増大（テロスへの漸近）を求めて他者を我有化しゆく経済的機構である。

記号体系における「回送＝参照指示 *renvoi*」の運動は、第一の差延の一例として理解できる。デリダによれば、記号連鎖の外部にあって記号の意味を確定する事物や観念そのものなど存在しない。ある記号を意味づけるものはそれ自身記号であって、諸記号は絶えず他なる記号へと回送され、差異の織物^{テクスト}のうちに位置を占めることで意味をもつ。

あらゆる概念は [...] ある連鎖ないしシステムのうちに書き込まれてお

り、それらの内部において、諸差異の体系的な戯れによって、他なるものへ、他の諸概念へと回送する。(M11)

他の記号を参照せず自らの意味を自己充足し、かつ他の諸記号の参照先となることによって、回送連鎖を打ち切り内部を完結させる「超越論的シニフィエ」は存在せず、「すべてのシニフィエはまたシニフィアンの態勢にもある」(P30)。それゆえ、諸記号は不可避免的に他なる記号(他者)へと関係し、意味づけの連鎖を構成することで意味の確定(テロス)を目指しゆくが、この連鎖は終端をもちえず、テロスの成就是無際限に先送りされる。

第一の差延は、迂回なき現前としての純然たる形而上学に比して外部＝他者に開かれているが、とはいえそれは目的論的地平の内部で展開する「同じものの有限なエコノミーにおける差延」(ED366)にすぎず、そこで出会われる他者は意味づけ可能な同質的他者でしかない。こうした同質性に還元不可能な絶対的他者への開けとして思考されるのが「第二の差延」である。デリダはかかる「まったく他者への関係」を「出来事」の名のもとに主題化し、その倫理的な価値づけを試みている。

出来事とは、絶対的に予測不可能な仕方で到来する他者との一回的な出会いの経験である。出来事としての外部は、内部のエコノミーに奉仕する同質的な外部ではなく、目的論的地平の外部から到来し、地平に裂け目を穿つ「絶対的異質性」(N363)である。

出来事の特徴の一つは、それが予見不可能なもの、歴史の通常の流れを切り裂きにくるものとして到来するのみならず、絶対的に特異なものでもあるということだ。(PI89)

差延は、次節で論じるように「自らのうちに、避けようもなく『同時に』[...] 反対の運動 [= 第一の差延] を含む」(ET18) といえ、第一義的には出来事への関わりにほかならない。

差延は、来るものあるいは来りつつあるもの、すなわち出来事の切迫性に赴こうとする思考である [...]。他者の予見不可能な到来がなければ差延もないだろう。(ET18f.)

出来事はすぐれて倫理的な主題であり、「正義」の問題系と直結している。すなわちデリダ的正義は、閉域に開けをもたらずまったく他者の到来(出来

事) に対して無条件の歓待を与えることを命じる。正義は「絶対的他性の経験」(FL61)として計算不可能なものである点において、計算可能性の閉域としての「法」から区別され、法指定の過程で疎外された法外の他者を内部へと招き入れるための、法による基礎づけを欠いた「決断不可能性における決断」を要求する(FL38, 50f.)。こうしたいわば他者への〈開門〉としての決断は、他者の排斥により内部を完結させる〈閉門〉としての独断的決断からは峻別される。

この「決断」という契機は、無際限の先送りとしての第一の差延にはない「切迫性」を要請する。「正義は [...] 待たない」(FL57) のであり、正義としての「差延は [...] 出来事の切迫性に赴こうとする思考である」(ET18)。第二の差延は、〈今ここ〉における絶対的他者への一回的な応答(歓待)としてしかありえない。かくして第二の差延とは、内部が絶対的外部による先取り不可能な侵入に身を委ね、ラディカルに自己同一性を引き裂かれ続ける運動である。外部を歓待するための決断は延期不可能だが、決断にともなう他性の侵入により、内部の完結はもはや取り戻しが目指されえない仕方で延期される(差延の「延」)。

2. 両立不可能な両立

以上を踏まえ、我々はいまや「差延」論文の次の一節で指摘されていた差延の二面性を判明に理解することができるだろう。

延期された現前性 [...] の取り戻しをつねに目指すエコノミー的迂回としての差延 [= 第一の差延] と、他方では [...] 見たところすべてのエコノミーを中断するまったく他者への関係としての差延 [= 第二の差延] とを、いかにして同時に思考するか。(M20)

二つの差延はいずれも外部による内部の侵犯運動であるが、この外部＝他者には、目的論的進行の途上に現れて内部へと同化される先取り可能な他者と、目的論的地平の外部より到来し、意味の秩序(エコノミー)を脱臼させる先取り不可能な他者という二つの次元が存在する。第一の差延は、「神の代理」としてのテロスによる一元的支配の体制を温存する点で形而上学的な閉鎖性を有しているが、第二の差延は形而上学の絶対的外部へと関係する。計算可能な差延と計算不可能な差延というこの二面性を通じて、デリダは内部の自閉に対する二段階の抵抗(形而上学→第一の差延→第二の差延)を組織していたといえるだろう。

では、これら二つの差延のあいだにはいかなる関係が存するのか。第二の差延によって外部への開けを実現できるのなら、第一の差延は不要ではないか。事はそう単純ではない。デリダは西洋形而上学の閉域からの「脱出」を企てつつも、脱出の完遂不可能性に絶えず直面してきた。というのも、絶対的他者への関係は、それとして思考＝志向される（名指される）ときにはすでにその純粹さを喪失しており、我有化のエコノミー（第一の差延）へと不可避免的に「制限」(G271) されてしまっている。こうした「墮落可能性」は、第二の差延の核心部に書き込まれており (DH119)、形而上学の有意味な諸概念を借用することなしには思考を展開しえない我々にとって、出来事（非一意味）は経験不可能にとどまる。他方、第一の差延の側からみれば、それは第二の差延が制限されることではじめて可能になる「効果」であるが、同時にその完結（テロスの成就）を起源において不可能にされてもいる (cf. DG206)。まったく他者は内部と単に対立する外部ではなく、内部の核心部に侵入しつつその一貫性を決定的に破綻させる。

二つの差延は、互いの純粹性を汚染するような仕方で「相互に含意し *impliquer* あうと同時に排除しあう」(DH75)。テロスの再我有化を目指すエコノミーと、目的論的体制を壊乱する出来事への開け、利益計算に基づく自己維持・発展の努力と、自己破壊的なまでの留保なき開放性といった相反するはずの二つの運動が、互いなしには存在しえないという相互依存的関係を構成するのである。この〈両立不可能な両立〉こそが、差延の「謎そのもの」(M20) であり、その眼目でもある。

エコノミー的迂回としての差延と、[...] まったき他者への関係としての差延とをいかにして同時に思考するか。エコノミー的なものと非エコノミー的なもの [...] を一緒に思考しえないということは明白である [...]。差延がそうした思考不可能なものであってみれば [...] 差延を明証性へともたらずことを急いではなるまい。(ibid.)

以上の事態を見誤り、二面のうち一方のみを顧慮する実践的態度は、不正義を招来する。一方で、相互包摂のプロセスをもつば第一の差延に還元する討議倫理（ハーバーマス）のような立場は、地平（＝討議的理性）外部の他者を排除する (cf. AC54ff.) が、他方で、第一の差延的なシステムの契機を完全に放棄し、他者を神格化するレヴィナス的挙措はかえって「最悪の暴力」へと転落する⁴ (cf. ED226)。実際、前期に「差延」論文やバタイユ論で「エコノミーと非エコノミーの関係づけ」として論じられた〈両立不可能な

両立)という主題は、文脈を変えて反覆されつつ⁵、後期正義論に至っていっそう前景化する。一方で、決断なき法の機械的適用は法外の他者を取り逃すが、反対に法なき決断、「いかなる法、いかなる規則にも準拠しない」で一切を賭けに委ねる態度もまた「純粹に正義にかなっている [...] とは言わない」(FL51)。デリダ的正義が要求するのは、「規制されつつ同時に規則なしにある」(ibid.) こと、つまり「理想的な法秩序」をテロスとして法の漸進的改良を進めつつ(第一の差延)、同時に法外の他者に対する切迫した応答として「[漸進的]改良のプロセスを中断する革命的契機への参照」(MS58)をも絶やさぬ(第二の差延)ことである。我々は「無条件の歓待」と「条件付きの歓待」とを同時に進行させなければならない。

だが、同時進行のモデルは〈両立〉を十全に表現しているとはいえない。他者を無条件に歓待するためにはそもそも法が存在してはならないし、無条件の歓待は目的論的体制の一貫性を破壊する。両契機は、一個のシステムに共存するかぎり互いの純粹性を毀損しあうのであり、両立どころか、その純粹性においては両者ともどつり逃されてしまう。後期正義論や歓待論は、この「アポリア」を抽象的な仕方で提示するにとどまっている。ところが我々の考えでは、こうした問題とは見かけ上無縁な中期郵便論のうちに、このアポリアに対する特異な応答を見いだすことができる。次節では、〈両立〉のモデル化という観点から郵便システムの分析に取り組むことにしたい。

3. 郵便システム

デリダは中期の著作において、第一節で見た記号あるいは「マーク⁶」の送り返しの運動を、郵便物が無数の郵便局のあいだを配達・中継されるさまに喩えて記述している(郵便論)。郵便論において強調されるのは、すべてのマークが「共通にもつ」性質、すなわち「非意味性」(Psy367)である。非意味性は、各マークの回送先=宛先の決定プロセスに避けがたく侵入する予測不可能性の謂いである。

この際立った非意味性は [...] それら [= 諸要素] を宛先の戯れのなかに入れ、そこに偏倚の可能な逸らしを刻みこむ。私がここで非意味性と呼ぶのは、一個のマークがそれ自体では、たとえ回送という形式であれ、一個の意味ないし事物に必ずしも結びつけられないようにする、そのような構造である。(ibid./下線は引用者)

エピクロス原子論における原子の運動の直線軌道からの逸れ(偏倚)にも

準えられるこの「宛先の逸らし」を、デリダは「宛先彷徨 *destinerrance*」あるいは「郵便的差延」(CP194 et al.)と呼ぶ。マークの回送の一回一回にはそのつど宛先彷徨がともなうのであり、このことは郵便の隠喩に照らして、「手紙は宛先に届かないことがつねにありうる」(CP472)という「誤配可能性」(東 1998)として表現される。

では、いったい何がこの宛先の逸らしをもたらすのか。郵便論研究の世界的先駆である東 1998 は、精神分析における「転移」の理論を参照しつつ高度に入り組んだ郵便解釈を展開しているが、本稿では次に引く「私のチャンス」(『プシュケー』所収)の一節に注目したい。そこでは誤配の原理がごく端的に語られている。

つまり、この**反覆可能性**は一個のマークを一度ならず妥当するようになるものなのだ。一個のマークは一つならずある。それは内部において多数化し、**分割**される。このことがマークの運動そのものに方向転換の力を刷りこむ。それは宛先(定め *Bestimmung*)において、不確定性の、チャンスの、偶然の、**宛先彷徨**の原理である。確実な宛先はない。(Psy369/強調は引用者)

「確実な宛先はない」という「宛先彷徨」は、「反覆可能性」にともなう「分割」の効果である。掘り下げて分析しよう。

起点となるのは、「反復 *répétition*」と「反覆 *itération*」の区別である。マークがマークとして機能するためには、それが同じマークとして繰り返し同定されうるものでなければならない。しかしこのプロセスは同一物の機械的複写(*répétition*)ではなく、**差異**を孕んだ繰り返し(*itération*)である(LI234)。マークは、使用者自身の グロワール・ディール 意 図 による統制下を離れて、読まれる(反覆される)たびに異なるコンテキストに置かれ、そのつど特異な意味を受けとる。

あらゆるマークの構造を形成する理念的反覆可能性 *itérabilité*、それはおそらくマークに、あるコンテキストから自らを差し引くこと [...], 他の場所で別の役を [...] 演じるべく移住することを可能にするものである。(Psy368)

反覆可能性は、マークにコンテキスト間の移動可能性を刻みこむ。裏を返せば、マークとは、無数のコンテキストにおける多様な意味の可能性を貫いて保持される**差異**を孕んだ**特殊な一貫性**の名称である(LI105)。こうした無

数の意味可能性による一個のマークの分有が「分割」と呼ばれる。分割は空間的な断片化というより、いわば諸コンテキストへの潜在的な分身（散種）として理解すべきである⁷。

ではこの分割がいかにして宛先彷徨をもたらすのか。ここで注目すべきは、分割の境位をなす「コンテキスト」と、第一節で見た回送システムの関わりである。

あるマークの同一性はまたその差異でもあり、他の諸マークのネットワークとのあいだの、コンテキストに応じてそのつど異なる関係でもある。
(Psy368)

「諸マークのネットワーク」とは回送システムにほかならない。デリダが「差延」論文などで記号の回送を語るとき、彼は暗にある特定のコンテキストに定位し、その内部での戯れを問題にしていた。そこではマークの運動がいわば平面化され、コンテキストの多数性は捨象されており、コンテキスト間を彷徨する私生児としてのマークの一面は後景に退いている。いまや我々は、回送連鎖の平面的な次元と交差するもう一つの次元、いわば垂直的な次元を導入しなければならない。事実、デリダは目的論的な「地平＝水平面 horizon」と出来事の「垂直性」を繰り返し対置している。

出来事のための [...] 地平など存在せず、ただ予見不可能性があり、しかも垂直にあるのだ。他者の他性という我々の地平のエコノミーに還元されないものは、つねに高みから我々に到来する [...]。(Psy358)

「非意味性」としての宛先彷徨は回送の地平を超過する。実際、デリダは誤配の成因を郵便配達人が「転ぶ *tomber*」という事態に喩えている (CP12) が、*tomber* は上方からの出来事の落下を語る際にデリダが頻用する語でもある。またデリダは、エピクロスにおける原子の落下運動や、*chance* の語源が *cadere* (落ちる) であるという事実などに言及し、宛先彷徨の垂直性を強調している (Psy357ff.)。

こうした垂直性を踏まえ、「私のチャンス」の記述に即して、回送システムに反覆可能性の論理を織り込んでみよう。各マークは、諸マークの回送連鎖ないし「ネットワーク」(Psy368) の平面において特定の位置を占めることによって意味をもつ。ところで、マークは「反覆可能性」により「分割」されているから、ある別のマークへと回送＝参照指示され、特定の意味を受

けとりかけたその瞬間に、ある平面から別の平面へ、つまり別のコンテクストへと垂直方向に移動ないし「移住」(ibid.)する可能性がある。デリダが用いた郵便配達の隠喩で言いかえれば、あるマーク A の意味は、ある郵便網 X (コンテクスト) においてマーク B へと配達される過程で、配達人の転倒により別の郵便網 X' へと出来事的に落下する可能性がある。X' において、A は X とは異なるネットワークに身を置き——「コンテクストに応じてそのつど異なる関係」(ibid.)——、B とは異なるマーク C へと回送され、X におけるのとは異なる意味を受けとる、つまり「別の役を演じる」(ibid.) ことがありうる。こうした一連の事態を X に定位して記述すれば、「B に届くはずだった A の意味が C に届いた」ことになる(誤配⁸)。この B から C への宛先の逸らし、すなわち二項関係「A→B」の「A→C」へのつながりかえ(cf. 東 2023)が「宛先彷徨」である。宛先彷徨は、先取り不可能なコンテクスト間の移動という出来事によって、マークの意味の確定性が毀損される「第二の差延」の運動である。

整理しよう。郵便システムにおいては、水平的かつコンテクスト内部的な第一の差延(回送)と、垂直的かつ間コンテクスト的な第二の差延(宛先彷徨)、言いかえれば目的論的な地平の進行と、出来事的な落下にともなう逸らしの運動とが一個のシステムのうちで共存し、〈両立不可能な両立〉を構成している。そこでは意味の確定(テロス)を目指して他なるマークを迂回するエコノミー的運動の一回一回に、非エコノミー的な迂回経路の逸らしが侵入し、二種類の他者関係が交錯する。郵便システムにおける意味と非意味とのこうした共存——「チャンスと必然性のキアスム」(Johnson 1993, 136)——について、デリダは次のように述べている。

言語は、次のような奇妙な傾向を特性としてもつマークの諸システムの一つにすぎない。すなわち、偶運的な不確定性の蓄えと、コード化 [...] の力とを同時に増大させる傾向である。(Psy354)

一方で、誤配は回送システムがなければ生起しえず、出来事としての誤配が純粋な仕方で現前することはない。他方で、回送システムは誤配可能性により意味の秩序を毀損される。両相は互いに互いの純粋性を汚染しあい、ぎこちなくシステム内に同居する。郵便論における〈両立〉は、弁証法的な高次の統一性への還元(和解)ではなく、意味への欲望と非意味性への開けとのあいだの葛藤を宿し続ける。『郵便葉書』などの奇怪な著述スタイルを要請したのは、両立不可能なものを両立させるための葛藤ないし負荷にほかな

らない。

それゆえ、郵便システムは〈両立不可能な両立〉のアポリアを解決するものではないが、アポリアのアポリア性を引き受けつつ「出口なき肯定」(CP90)を営むための特異かつ具体的な枠組みを提示している。それは第一の差延の各過程（回送）の内部に第二の差延を刻みこむことによって、水平的な関係のネットワークの存在措定においてシステムの契機を、コンテクスト間の移動にともなう関係のつなぎかえの可能性において絶対的他性の場を、それぞれ確保する（つなぎつつつなぎかえられる）という応用可能性に富んだモデルを構成している。郵便論において〈両立不可能な両立〉は、回送連鎖の連続性を保持しつつ無限後退させる第一の差延（単体）とも、一切のシステムを欠いた第二の差延（単体）とも異なる、細部に無数の断裂線が走るシステムとして結実した。多数の郵便局のあいだを郵便物がつぎつぎに中継され、なおかつ中継の各過程に錯誤のリスクが存在する「郵便」の隠喩は、こうした思考に格好の場を提供したといえる。

最後に、東 1998 による解釈との対比から二点補足しておきたい。

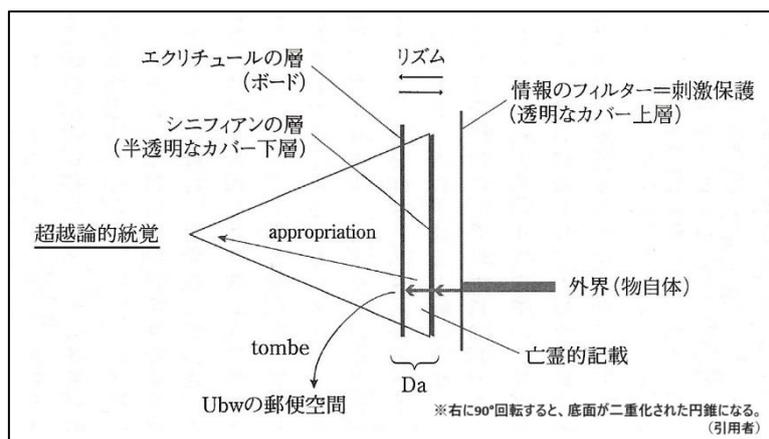
第一に、宛先彷徨の不可測性は確率的偶然性ではありえない。確率的に予期可能なものは出来事の名に値しない(ET21)。確率は計算可能であり、「1」という全体（地平）によって統制されるため、計算不可能な宛先彷徨を表現する装置としては不適切である。

送付の宛先彷徨は、その偶運^{アレア}と計算不可能性とが還元不可能なある構造に結びついている。(Psy413)

記号は、それが受けとられる瞬間ごとに、使用者の意図を裏切って、まったく想定外のコンテクストに置かれ、想定外の記号へと送り返す可能性がある。デリダが語る回送の不確定性はきわめてラディカルなものであり、このラディカルさは正義論へと通じる倫理的関心に裏打ちされている⁹。それゆえ、東 1998 のように「確率」概念によって誤配を記述することには、出来事の予見不可能性を縮減し、程度問題へと帰着させてしまう危険がある。開放性と閉鎖性は量的に折衷されてはならず、両相の質的差異が尊重されなければならない。

第二に、とはいえデリダは不可測性の面だけを強調しているわけではない。郵便システムは単なる断片の寄せ集めではなく、「コード化」の機能をもつ「システム」である(Psy354)。東 1998 は、郵便システムにおいては「システムの全体にたとえ否定的にでも言及する必要がない」(東 1998, 118/傍

点略)と述べ、形而上学からの隔絶を強調しているが、東が最終的に郵便システムのモデルとして提示したマジック・メモモデル(下図/東 1998, 322)のうちに、「超越論的統覚」を導入したその身ぶりにおいて表れているように、システムが成立するうえで「神の代理」的な審級は不可欠である。「他者の絶対性」と「形而上学への内在性」という二つの面は、どちらも捨象されてはならない。



結語

本稿では、デリダ思想の異質な二側面に一貫した論理を与える枠組みとして「差延の二面性」に注目し、「転回」の前後を問わず、彼の思考がそれらの〈両立不可能な両立〉という根本問題に導かれていたことを示したうえで、〈両立〉のユニークな描像として中期郵便論を読解し、独自の解釈を提示した。

デリダはある会合で、〈両立不可能な両立〉の営みを「神の記憶をもったラディカルな無神論」(PV23)と形容している。それは非十全な無神論(第一の差延)を超過する「ラディカルな」他性への開け(第二の差延)を核心にもつが、しかし「神の記憶」、すなわち形而上学性の残滓をも拭いきれず保持している。構造的に閉域に囚われざるを得ない我々が、それでもなお先取り不可能な他者を歓待しようとする、半身身を乗りだすかのごとき困難な努力をこそ脱構築は肯定するのである。

『郵便葉書』第一部「送付」における「僕」と「君」の関係性をめぐる記述は、郵便論のうちに〈両立不可能な両立〉を見てとる本稿の解釈を裏づけつつ、ある種の実践的指針を含意しているように思われる。「送付」は「僕」(≡デリダ)が恋人ないし配偶者と思しき「君」に送り宛てたおびただしい数の擬似書簡が267頁にわたって陳列される異様なテキストである。郵便的な断裂性を基調とするこのテキストにおいて異彩を放つのは、「僕」が「君」

に対して示す信仰にも似た執着心である。我々の考えでは、こうした「君」の神格化は、郵便システムに残存する形而上学性の契機、すなわち第一の差延の到達不可能なテロスに対応している。実際、「僕」は「君」を「生きたパロール」や「現前性」に喩え、「形而上学」と名指してすらいる。

君はいつも、「僕の」形而上学、僕の人生の形而上学 [...] だった（僕の欲望、パロール、現前性、近接性、法、[...]）。（CP212）

だが、宛先彷徨の効果により「君」への愛と弁明のメッセージは絶えず逸らされ、「君」のもとに純粋な状態で届くことはない。

僕は君に、君のところまでたどり着きたい、僕の唯一の運命よ、それで僕は走る、走る、そしていつも転んで *tomber* しまう。（CP28）

「僕」はこのことに苛立ちつつも、同時に郵便システムの不可測性を肯定的にとらえてもいる。

手紙は決して宛先に届かないことがつねにありうる [...]。それは否定的なことではない、それはよいことだ、まさに何か起きるための [...] 条件だ。（CP133）

かくして、君への形而上学的欲望と出来事への歓待とのあいだに衝突が生じる。「真の手紙は唯一、君にだけ取り置かれたものだ」、だがこの閉鎖性は「僕の郵便葉書への崇拝と矛盾する」（CP89）。この「矛盾」は、二つの差延の両立不可能性と構造的に等しい。「君」の我有化を欲望する目的論的な「僕」と、宛先彷徨がもたらす予想外のズレや事故を楽しみつつ郵便葉書を愛する「僕」——これら二つの顔をあわせもち、飽くことなく郵便葉書を投函しては何かを起し続ける「僕」の生きざまは、コスモスへの欲望とカオスへの開けとの両立不可能性がもたらす負荷を引き受けつつ、かかる「アポリア」を「チャンス」に変えて（DE63）営まれるデリダ的な生の模範といえよう。我々は、こうしたいわば「郵便的人間」の実存様式をモデルに、正義や歓待といった実践的文脈における〈両立不可能な両立〉のあり方を再構築することができようが、そうした課題には機を改めて取り組みたい。

注釈

- (1) 象徴的な例を挙げれば、Gasché 1986 は「下部構造」における非エコノミーの契機を語り落とした一方、高橋 1998 は逆に、デリダ思想を「まったく他者への関係」という観点から一元化している。
- (2) 実際には、前期にも第二の差延的な契機は存在し、後期にも第一の差延的な契機は存在する（第二節）。重点の置かれ方が変化したとはいえ、〈両立〉という主題そのものは前期から後期まで一貫している。
- (3) 先行研究では、亀井 2019 が差延の二面性に言及しているが、〈両立〉の具体的なあり方にまで踏み込んで論じてはいないほか、同書を含め、差延の二面性と郵便論の関わりを論じた研究は小見のかぎりでは存在しない。
- (4) 「暴力と形而上学」で企図されたのは、第二の差延そのものの否定ではなく、第二の差延を単体で措定しようとするレヴィナスに対して第一の差延の不可欠性を指摘し、第二の差延を〈両立〉へとズラす操作であった。
- (5) 以下に、二つの差延に対応する契機としてデリダが論及した概念対のうち主要なものを掲げておく。

第一の差延	第二の差延
目的論	出来事
(限定) エコノミー	非エコノミー
統制的理念	正義の理念*
メシアニズム	メシアニズムなきメシア的なもの
条件付きの歓待（寛容）	無条件の歓待
交換	純粹贈与
生の欲動（免疫）	死の欲動（自己免疫）
取り込み <i>introjection</i>	体内化 <i>incorporation</i>
回送**	宛先彷徨

* 第二節後半で確認したとおり、正確には〈両立不可能な両立〉に対応する。

** 差延と同様、回送にもエコノミー的なものと非エコノミー的なものがある（cf. V62f.）が、本稿で論じたマークの回送運動は、前者の意味での回送にあたる。一方宛先彷徨は、後者の非エコノミー的な回送に対応するといってもよい。

- (6) 「マーク」は、記号をはじめ、経験的事物、感覚、時間・空間など、システムを構成する「要素」一般を表す「最大の一般性」をもつ概念である（Psy369）。本稿では言語を例にとって郵便システムを記述するが、前者は後者の一例にすぎない。
- (7) ラカンの目的論的なポー読解に対する批判の論拠とされた手紙の分割可

能性も、こうした意味で解されるべきである。

(8) 個々の記号が想定外の記号へ送り返すということは、複数の記号からなる言明もまた想定外の意味に解されることを意味する(メッセージの誤配)。

(9) Miller 2009 は、正当にも宛先彷徨の計算不可能性を正義と関連づけて論じている。

参考文献

一. ジャック・デリダのテクストからの引用に際しては、以下の略号により書名を示したうえで原書の頁数を併記する。

AC: *L'autre cap — suivi de La démocratie ajournée*. Paris : Minuit, 1991.

(高橋哲哉・鶴飼哲訳、國分功一郎解説『他の岬——ヨーロッパと民主主義』みすず書房、2016年)

AD: *Arguing with Derrida*. Glendinning, Simon (ed.). Oxford: Blackwell, 2001.

CP: *La carte postale : de Socrate à Freud et au-delà*. Paris : Flammarion,

1980. (若森栄樹・大西雅一郎訳『絵葉書——ソクラテスからフロイトへ、そしてその彼方 (I・II)』水声社、2007-2022年)

DE: *Deconstruction Engaged: The Sydney Seminars*. Patton, Paul. &

Smith, Terry (eds.). Sydney: Power, 2001. (谷徹・亀井大輔訳『デリダ、脱構築を語る——シドニー・セミナーの記録』岩波書店、2005年)

DG: *De la grammatologie*. Paris : Minuit, 1967. (足立和浩訳『根源の彼方

に——グラマトロジーについて (上・下)』現代思潮新社、1972年)

DH: *De l'hospitalité*. Avec Dufourmantelle, Anne. Paris : Calmann-Lévy,

1997. (廣瀬浩司訳『歓待について——パリ講義の記録』筑摩書房、2018年)

ED: *L'écriture et la différence*. Paris : Seuil, 1967. (谷口博史訳『エクリ

チュールと差異 (改訳版)』法政大学出版局、2022年)

ET: *Échographies de la télévision : Entretiens filmés*. Paris : Galilée, 1996.

(原宏之訳『テレビのエコーグラフィ—デリダ (哲学) を語る』NTT出版、2005年)

FL: *Force de loi : Le « Fondement mystique de l'autorité »*. Paris : Galilée,

1994. (堅田研一訳『法の力』法政大学出版局、1999年)

G: *Glas*. Paris : Galilée, 1974.

- LI: *Limited Inc.* Paris : Galilée, 1990. (高橋哲哉・増田一夫・宮崎裕助訳『有限責任会社』法政大学出版局、2002年)
- M: *Marges – de la philosophie.* Paris : Minuit, 1972. (高橋允昭・藤本一勇訳(上)、藤本一勇訳(下)『哲学の余白』法政大学出版局、2007–2008年)
- MS: *Marx & Sons.* Paris : PUF / Galilée, 2002. (國分功一郎訳『マルクスと息子たち』岩波書店、2004年)
- N: *Negotiations: Interventions and Interviews, 1971–2001.* Rottenberg, Elizabeth (ed. & tr.). Stanford: Stanford University Press, 2002.
- P: *Positions.* Paris : Minuit, 1972. (高橋允昭訳『ポジション』青土社、1981年)
- PI: Une certaine possibilité impossible de dire l'événement. In : Derrida, Jacques., Soussana, Gad., & Nouss, Alexis. *Dire l'événement, est-ce possible ? : Séminaire de Montréal, pour Jacques Derrida.* Paris : L'Harmattan, 2001, pp. 79–112. (西山雄二・亀井大輔訳「出来事を語ることのある種の不可能な可能性」、齋藤元紀・澤田直・渡名喜庸哲・西山雄二編『終わりなきデリダ——ハイデガー、サルトル、レヴィナスとの対話』法政大学出版局、2016年、9–41頁)
- Psy: *Psyché : Invention de l'autre.* Tome I. Paris : Galilée, 1998. (藤本一勇訳『プシュケー——他なるものの発明 I』岩波書店、2014年)
- PV: Penser ce qui vient. In : *Pour les temps à venir.* Major, René (dir.). Paris : Stock, 2007.
- V: *Voyous : Deux essais sur la raison.* Paris : Galilée, 2003. (鶴飼哲・高橋哲哉訳『ならず者たち』みすず書房、2009年)

一. その他の参考文献は以下のとおりである。

Gasché, Rodolphe. *The Tain of the Mirror: Derrida and the Philosophy of Reflection.* Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1986.

Johnson, Christopher. *System and Writing in the Philosophy of Jacques Derrida.* Cambridge: Cambridge University Press, 1993.

Miller, J. Hillis. *For Derrida.* New York: Fordham University Press, 2009.

Weber, Elisabeth. *Questions au judaïsme.* Paris : Desclée de Brouwer, 1996.

東浩紀『存在論的、郵便的——ジャック・デリダについて』新潮社、1998年。

東浩紀『観光客の哲学 増補版』ゲンロン、2023年。

亀井大輔『デリダ——歴史の思考』法政大学出版局、2019年。

高橋哲哉『デリダ——脱構築』講談社、1998年。

テネフ, ダリン「デリダにおける贈与と交換 (Derridative)」(横田祐美子・松田智裕・亀井大輔訳)『人文学報・フランス文学』第511号、2015年、163–187頁。

宮崎裕助「反覆可能性の法——デリダ『有限責任会社』と行為遂行性の問題」『哲学・科学史論叢』第3号、2001年、71–93頁。

一．外国語文献の引用にあたっては、上表記載の邦訳書を参照のうえ、引用者の責任において訳出した。

一．引用中の[˘]は、特に断りがないかぎり原文著者による強調を表す。また、〔〕内は引用者による補足である。